

〈書評〉

W・G・ビーズリー著
杉山伸也訳

『日本帝国主義 一八九四—一九四五』

——居留地制度と東アジア——

』

北川 勝彦

歴史が過去から創りだすものには、知的再解釈が含まれているのを常とする。とすれば、歴史家にとって、真実を示すこと、あるいは歴史家が真実であると考えるものを示すことこそ、すべてに優越するのではないだろうか。「歴史に真の生命を見出そうと願うものは、森に木を群衆の中に個人を見落としてはならない」とホイジンガは言った。人は、人生経験が深く豊かであればあるほど、またその経験を通して鍛えられた心が広くかつ多面的であればあるほど、資料の山の中から実証する素材を巧みに選び出す眼をもつことができるに違いない。ビーズリーの書物を手にした時、寸暇をおしむかのように外交史料と取り組んでいる

著者の姿を想像したのは評者一人ではあるまい。そうした歴史家としての方法態度と意欲を感じさせる労作が、気鋭の経済史家、杉山伸也氏によって訳出され、日本史研究に関心をよせる人々の共有財産となったことを喜びたいと思う。

戦後日本は、軍事大国化を不必要とし、日本の経済発展を歓迎する西側諸国との協調のもとで経済を軍事に優先させ、自らを経済強国としてきた。しかし、これには、戦前と戦後を通じて、英米をはじめとする先進諸国には『国際協調』として、中国や東南アジア諸国には『大国的傲慢』として現われる「帝国意識」が結びついていたという批判もしばしば耳にするところである。

日露戦争後四十年と第二次世界大戦後四十年という『二つの戦後』を重ねあわせて現在を考えると、とくに一九八五年以降、再び経済強国となり「時の勢い」に乗じて経済的「侵略」の目立ちはじめた日本をビーズリーは、意識しないではいられなかったのではないだろうか。彼の次のような警句に耳を傾けないわけにはいかない。

「日本帝国主義のさまざまな結果が一九四五年の無条件降伏とともに終わったのではない。……日本帝国主義が喚起した感情的問題も依然として終っていない。大東亜共栄圏を苦い思いで回顧する人々は、米軍占領以降の日本の緊密な対米提携関係が『従属的』帝国主義であるとか、あるいはアジア

における日本の通商上の成功は日本の不平等な『共栄圏』再建の試みを示しているとか、あるいはまた軍国主義は日本人の生活の表面下に依然として残っているという議論を容易に納得するか、あるいは容易に説得されてしまう。そのような疑念は五十年にわたる帝国主義国としての行動に対して日本が引きつづき支払わねばならない代価である。」

それにしても、「世界の民衆と日本の民衆が互いに従属したり搾取することなく平等に生きる」という、考えてみればあたりまえの関係の構造を築き上げることは、はたして可能なのであろうか。世界の動きの中に日本と自己を位置づけ、「外」と「内」に開かれた真の歴史意識の樹立をめざして、アジアや世界の人々からの厳しい批判を受け止めえない『孤絶の歴史意識』からの脱却が今日ほど求められている時代もないであらう。

ところで、日本の近代史あるいは近代史研究は、日本帝国主義史とその研究を抜きにして成立しえず、日本帝国主義研究は、

日本植民地研究を不可欠の構成要素としてゐる。ところが、日本における帝国主義研究は、レーニンの『帝国主義論』に準拠し、マルクス主義の視角に立った分析か、あるいはごく限定された時期と、地域を対象とする詳細な実証研究のいずれかの傾向を示しているのが実状である。日本帝国主義の研究は、日本史という現象と世界的広がりをもつ帝国主義という現象、さらにこの二つの現象の関係の構造を明らかにするところ

に成立すると思われる。本書が、欧米における帝国主義研究の成果と日本における帝国主義研究ならびに日本帝国主義研究の蓄積を踏まえて、アジア的バースペクティブで日本帝国主義の形成・発展・崩壊の歴史的展開を明らかにしようとしている点は、類書の追隨を許さない。しかも、ヨーロッパおよび日本国内の一次資料と主たる研究に依拠した議論は、人を充分に説得するに足るものである。しかしながら、ビーズリーの理論的枠組を支えていると思われるイギリスにおける「自由貿易帝国主義」論にはじまるイギリス帝国史に関する論争

と諸研究には、『イギリス自由貿易帝国主義』の著者が語るように、「市場論」として語られ「構造分析という面での弱さ」を持ち、イギリス一国の分析が中心であったために「帝国主義の世界史的位置づけ」言いかえれば、帝国主義一般の理解へのつながりという点で難点があった。以上のような諸問題に対する本書の立場は、人を満足させるには不安が残る。

それでは、日本帝国主義は、いったいどのような観点からどのように構想すべきであらうか。日本帝国主義史研究が日本帝国の本質と諸原因のみならず、その生成、発展、解体の歴史を考察する点にあることは論をまたない。その場合、ビーズリーは、日本帝国主義史を「日本史の一要素」として、すなわち日本の国家と国民が反応してきたナショナリズムや経済の近代化や立憲政体の発展と並行する一つの道として把握するとともに、「世界史の一部」として他の帝国主義国と比較可能なものとして把握しようという意欲を感じさせる。ここには、ヨーロッパ帝国主義が非ヨーロッパ世界を

基礎 (Non-European Foundations of European Imperialism) として成立したように、日本（＝非ヨーロッパ）帝国主義がヨーロッパの構築した世界秩序を背景 (European Foundations of Non-European Imperialism) としてはじめて成立したことが示される。とりわけ、ビーズリーが注目するのは、東アジアにおいてヨーロッパ帝国主義の構築した居留地制度とその機能であった。残念ながら本書を通してこの居留地制度の具体像は十分に理解することができなかった。この点は、我国における居留地貿易の研究、居留地社会の研究、さらに両大戦間期における日本の貿易と投資に関する研究、などを踏まえ、居留地の具体的な機能を実証的に明らかにし、日本帝国主義の重要な一面を解明する基軸概念の内実を整えていく必要があると思われる。

い状態に置かれている地域（非公式帝国）との結合構造を指す。すなわち、日本帝国は、朝鮮および台湾における直接的植民地支配から満州における勢力範囲の漸進的拡大および中国における居留地制度による経済的特権の確定という半植民地的構造などのより緩やかな形態による支配に至る結合構造を有するとともに、後にはその周辺に東南アジアを含む南洋全域にわたる「共栄圏」を加えるに至った。また、どのような観点から日本帝国の発展を考察すべきであろうか。ビーズリーは、これを日本帝国の発展を規定した二つの要因から説明している。第一は、日本の対外膨張が、日本資本主義の工業を中心とした構造への変化に応じて、工業製品市場と原料供給源の確保および貿易利益の追求と関連するようになった点、第二は、日本の膨張が東アジアにおいてすでに確立されていた西洋帝国主義の体制＝居留地制度の中で機能しなければならなかったために、時の経過とともにそれを修正するか、あるいは解体するかという政策の選択に迫まれたという点であった。

しかも、日本の帝国主義政策は、日本の周辺防衛地域への特殊権益の擁護と中国における通商の優位の獲得を目指すものであったが、後発帝国主義国に属しながらロシアを仮想敵国とする戦略的必要から英米協調路線をとるという実に危いバランスの上に成立したという点を付け加えておかねばならない。そのために、共に帝国主義の主唱者であるにもかかわらず、軍部（満州における特殊利害の主張）と外務省（中国本土における条約特権の利用）の対立をはらんでいたのである。この日本帝国主義は、一九三〇年を境に大きく旋回する。一九三〇年までの段階では、辛亥革命による居留地制度の政治的基盤の崩壊と第一次世界大戦中のヨーロッパ列強による中国への介入能力の低下のために後の「共栄圏」構想を生みつつも、列強に対する防衛と食糧確保のための植民地および勢力範囲の形成、条約に基づく諸権利に支えられた国際制度の構成国となることで貿易と投資の機会の獲得、日本の産業発展の必要上中国との特殊な関係の形成がみられ、一九〇五年以降どちら

かといえば「非公式」の「経済的」帝国主義への傾斜が看取される。ところが、世界恐慌を契機として経済的自立政策が追求されるに至る。すなわち、「国防問題における軍部の要求」、「市場とその保護に対する財界の要求」、「アジア連帯に対する感傷的願望」をかかげて「危機の国家」を叫ぶ人々が台頭し、「大東亜共栄圏」の構想が具体化されていったが、これが「国家の危機」を招くに至ったのである。

以上のように、本書は、我国における帝国主義研究と日本帝国主義研究に対してだけでなく欧米の帝国主義研究に新たな知見を提示したという点で評価されねばならない。しかし、アジアにおける日本帝国主義とヨーロッパ列強との利害関係、中国および東南アジアにおける日本の進出と現地資本の利害対立、さらに日本帝国主義政策の決定過程における利害対立などに関する今一步踏みこんだ議論の展開は、膨大な実証研究を待つてはじめて可能になるものであろう。

また、世紀転換期において、たとえばイ

ギリス帝国主義の「自由貿易帝国主義」から「新帝国主義」への移行期に、日本帝国主義は何を共有し、何を共有しなかったのか、その場合、「商業的帝国主義」論や「将来の市場」論などは、日本帝国主義研究にどのように関連してくるのかという理論的問題も残されている。ビーズリーの今後の研究を期待したい。

周知のごとく、植民地支配の衝撃と植民地遺制に関する諸問題がくりかえし論じられている。今日、過去に植民地支配をうけた国々は、民族と国家の不一致を克服する政治的枠組の構築、植民地型経済構造からの離脱と経済の自立化、さらに人間の尊厳の回復といった諸問題をかかえている。植民地支配は、「支配する側」も「支配される側」も少なくない傷跡と代償を残す。本書を通して、ビーズリーの扱った時代の日本社会を政治的、経済的、文化的に支配していた階級と、この支配の担い手のヘゲモニーが日本近代史の一つの重要な特質を成していた日本帝国構造によって支えられていたことを改めて考えさせられた。そして、

帝国の構造は、支配階級だけでなくむしろ社会の最下層にいたほとんどの日本人にとって生活に大きな影を落としていたのである。「民衆の日本帝国」と「日本帝国の民衆」をぬきにして日本帝国主義は語れないと思う。冷静な研究の対象となる記録としての過去とわれわれの人生の背景をなし、その記憶の一部となっている過去の間に存在するどちらとも言えない過去を取りあげたビーズリーの歴史家としての勇氣ある態度に敬意を表したい。本研究が、我国における日本帝国主義の研究に大きな前進を示したと確信するものは評者一人ではないはずである。

(一九九〇年一〇月刊 岩波書店)